

011	編集長独白
013	表紙の時計 / モリッツ・グロスマン ユニテフヌート・ジャパンリミテッド
015	Editor's Choice!
024	ジャケドロー プティ・ウール ミニットレリーフ カープ / ショパール ルックアウト / ハリー・ウィンストン HW オーシャン デュアルタイム オートマティック44mm / ブルガリ オクトヴェロチツシモ タキメーター 日本限定モデル / カールF. フヘラ パトラビトラベルテックII / ユリスナルダン マリーナ クロノメーター マニファクチュール / ドウグリソゴフ ニューレトロ N05 / ブライトリング フォーベントレー ベントレー GMT ライトボディ B04 ミッドナイトカーボン / ロマン・シエローム RJX スーパーマリオリザーズ
026	世界は時計で回っている。
028	ルイ・ヴィトン プライヴ グトウールピヨン《ボワソンドジュネーブ》
030	「ジュネーブの正統派」への意欲
032	ジラルールペルゴ ミニッツリピーターゴールドブリッジトウールピヨン
036	ストライキング・ウォッチが宿すジラルールペルゴの魅力
037	ガラスヒュッテ・オリジナル セネタ・コスモポリト
036	引き算が生んだ世界を旅する人のための実用時計
032	日本市場にお目見えした「ローマン・ゴティエ」
036	「伝統の革新」を目指すジユウ溪谷の新星
037	A.ランゲ&ゾーネ ツァイトベルク ミニッツリピーター
037	鳴りものシにみるドイツ流思考
037	「ピアジエ」
055	美の創造を支える薄型ムーブメント
055	2016年ブランド別新作情報(ジュネーブ編)
055	手堅い新作から窺い知る安定成長戦略

今日、スイスの時計メーカーのなかで薄型ムーブメントの開発に最も力を注いでいるのがピアジエだ。その歴史は1950年代に遡る。「正確で贅沢な時計」を基本としたピアジエにとって、贅沢な時計は薄く、エレガントなものを意味した。そして薄型ムーブメントと共に、ピアジエは大胆なクリエイションでも注目された。ピアジエの薄型ムーブメントと創作をみてみたい。

手堅い新作から窺い知る安定成長戦略

2010年以降、毎年、輸出量を増やしてきたスイス時計産業だが、次第に陰りを見せてきている。今後の状況が懸念されるなかで開催されたSIHHやWPHH。しかし新作は比較的買いやすい価格帯からハイジュエリー・ウォッチのユニークピースまで幅広い。ブランド別に今年の主要な新作をご紹介します。

094	時計ジャーナリスト 瀧澤 広の「マイ・チヨイス」 第19回 24時間表示時計
096	ロンジン「トウエンティフォー・アワーズ」 最近のラドーに思うこと
099	ラドー「ハイパークローム・クロノグラフ・タキメーター」 「ダイヤマスター・グランドセコンド」 「ニュートウル・オープンハート」 ノモス・ガラスヒュッテ「ネオマティック1st エディション」
100	日本で輸入を開始したドイツ・ブランド「ダマスコ」 機械加工技術を生かして堅牢な時計製造に挑む
101	カシオ「WSD-F10」 アウトドアに特化したスマート・ウォッチの登場
102	腕時計新着情報
110	「ロレックス・ディープシー」のケース&ブレスレット研磨（ロレックスサービスセンター）
111	ヴァシユロン・コンスタンタン銀座ブティック 「ヘリテージ・ピース23点を期間限定で展示、販売」
112	クロノメトリー・フェルディナント・ベルトウー
114	「カール・フレドリッヒ・シヨイフレ氏の新たな情熱」 インポート・ウォッチ・オブ・ザ・イヤー（IWY）2015-16
116	第2回「IWY受賞時計発表」 ロンジンブティック銀座
117	日本初のロンジンブティックが銀座にオープン ブレゲ・ミュージアム
118	ブレゲがA.L.ブレゲ作の歴史的な時計2点と貴重な文書を落札 日本時計師会・公認上級時計師（CMW）・公認時計師（CW）認定試験
120-128	CMWを目指す技術者に向けて新設されたCW認定 インフォメーション／問い合わせリスト／奥付

日本市場にお目見えした「ローマン・ゴティエ」

「伝統の革新」を目指すジュウ渓谷の新星

2005年にジュウ渓谷のル・サンティエに誕生した新進ブランド、ローマン・ゴティエが昨年、日本での展開を開始した。ムーブメントには伝統的な手作業による仕上げを施す一方で、フュゼチエーンの新開発を挑むなど、意欲的な活動を行っている。

オーデマピゲ、ヴァシロン・コンスタンタン、ブレゲをはじめとする高級ブランドが工房を構えるジュウ渓谷には大規模な有名ブランドのみならず、彼らを支える部品製造やムーブメント開発を専門とする工房が存在する。創業10年足らずのローマン・ゴティエもそのひとつだ。

ローマン・ゴティエ氏は1975年、ジュウ渓谷のル・サンティエに生まれた。ル・サンティエの時計学校で精密機械工



「プレステージ HMS TEN」。ローマン・ゴティエ創設10周年を記念して2015年に発表したモデルで、2010年発表の「プレステージ HMS」（左ページの下の写真）の文字盤デザインを変更し、よりクラシカルでエレガントなものとなっている。4時から8時位置をカットアウトした文字盤も、プレステージ HMSよりも自然で、目に馴染みやすい。カットアウトの部分からテンプレートと、秒針を動かしている歯車を見ることができる。時・分針を回した12時位置のサブダイヤルの周囲にクル・ド・バリのパターンが施されている。手巻きのCal.HMS (22石、毎時2万8800振動、パワーリザーブ約60時間)を直径41.0mm、厚さ12.1mmのケースに搭載する。写真はブルーの文字盤を備えるプラチナ製ケース。3気圧防水。価格1296万円。ほかに18KRG (価格1026万円)、18KWG (価格1080万円)がある。



「プレステージ HM」。2005年に発表したローマン・ゴティエ最初のモデルで、オフセンターに時分針のサブダイヤルを備えた文字盤には繊細なギョウシェ彫りが施される。ケースの曲線を邪魔しないように、裏蓋側においたリュウズがローマン・ゴティエの特徴だ。ムーブメントは手巻きのCal.HM (22石、毎時2万8800振動、パワーリザーブ約60時間)を搭載する。ケースの直径は41.0mm、厚さ12.1mmで、写真は18Kレッドゴールド製。3気圧防水。価格864万円。ほかに18KWG (価格918万円)、プラチナ (価格1026万円)。



「プレステージ HMS」。2010年発表。プレステージ HM同様に12時位置に時分針を回したサブダイヤルを備え、また5時位置にスモールセコンドを加えた第2作目。サブダイヤルを含む文字盤の約1/3にあたる部分をカットアウトし、ムーブメントの一部を見せている。写真はブラックADLC加工を施したチタニウム・ケースで針の先端や目盛り、ストラップのステッチの赤がアクセントとなっている。ケースの直径は41.0mm、厚さ11.3mm。ムーブメントは手巻きのCal.HMS (22石、毎時2万8800振動、パワーリザーブ約60時間)を搭載する。3気圧防水。価格896万4000円。ほかにチタニウム (価格864万円)、18KRG (価格1026万円)、18KWG (価格1080万円)、PT (価格1296万円)が揃う。

学を学んだ後、97年にCNCマシンのプログラマーとして部品メーカーのフランソワ・ゴレ社に入社した。その後、自身のブランドを創業することを決心し、ビジネスを学ぶために2000年にローザンヌ・ビジネス・スクールに入学し、02年に同スクールと姉妹関係にあるジュネーブ・マネージメント・スクールでMBA (経営学修士) を取得している。そのときの修士論文がローマン・ゴティエ・ウォッチ

の事業計画をテーマとしたものだった。修士論文の内容を実行に移し、会社設立、時計の開発、製造に着手して4年後の05年に最初の時計「プレステージ HM」が完成、それとともにローマン・ゴティエ・ブランドを創業した。ローマン・ゴティエ氏は時計師ではなくエンジニアであり、またブランド創業を視野に入れてMBAを取得したという、スイスの時計業界では新しいタイプの起業家といえるだろう。

最初の時計となった「プレステージ HM」(Hは時、Mは分の意)はオフセンターに配置された文字盤、裏蓋側においてリュウズ、シースルー・バックから見ることができるムーブメントの部品の仕上げなど、その後に発表されたローマン・ゴティエの時計の特徴を見ることができ、10年には前作に秒針をつけた「プレステージ HMS」(Sは秒の意)を発表。カットアウトした文字盤からは独特の形状の2番車とテンワを見ることができ、

2015年のバーゼルワールドでは創業から10年を経たことを祝い、「プレステージ HMS TEN」を発表した。また後出の「ロジカル・ワン」にブラックチタニウムあるいは18Kホワイトゴールドのケースのふたつのモデルに加え、パリエーションを広げている。「ロジカル・ワン」は13年のジュネーブウォッチグランプリで複雑時計部門賞を獲得し、スイス時計のなかで確実な地位を築いた。

現在、ローマン・ゴティエの工房には18人が働いている。そのうち時計師が3名、手作業による研磨や仕上げを行う職人が2名、コート・ド・ジュネーブやサークュラー・グレインなど工具を使い裝飾や仕上げを行う職人が3名、そのほか10名がCNCマシンのプログラミングや部品製造、また管理部門を担うという布陣だ。現在、製造個数は年間約60個足らずだが、他ブランドに供給する香箱やブリッジ、テンワ、トゥールビヨンのケースなどの製造も大きな柱となっている。



1958年発表の自動巻きの12P(30石、毎時1万9800振動、パワーリザーブ約40時間)は236部品で構成され、直径28.1mm、厚さ2.3mm。オフセンターに24Kゴールドのマイクロローターを備え、薄さを実現した。



1956年に発表し、ピアジェの薄型ムーブメント開発の幕を開けた9P(18石、毎時1万9800振動、パワーリザーブ約36時間)は89部品から成り、直径は20.5mm、厚さは2.0mmだった。



ジョルジュ・エドアール・ピアジェが今日もピアジェが製造拠点のひとつとするスイスのラ・コト・オフエに工房を設けたのは1874年のこと。しかしピアジェという名前が一般に知られるようになるのは第2次世界大戦後を待たなくてはならない。なぜならピアジェは脱進機に始まり、やがてムーブメントの製造さらに完成品の組み立てまでを行ううまでに発展したが、それは他社に納品するためであり、ピアジェの名で時計を作ることはなかった。1920年代の台帳を見ると、ヴァシロン・コンスタンタン、オーデマピゲ、カルティエ、オメガなどがピアジェの取引先であったことがわかる。1930年10月2日にはカルティエに角形のスケルトン・ムーブメントを納入したと記録される。ピアジェは高級メーカーにとっては欠かせない存在であり、彼らが求める品質や美しさをもつムーブメントや完成品を提供することで、ピアジェは技術的にも成長していったのだろう。そのノウハウを生かして、ピアジェの名前で時計を製造し、販売することを決めたのは、3代目のジェラルドとバレンタイン・ピアジェだった。「贅沢と正確さ」というこの頃の広告のキャッチコピーが示すように、ピアジェは高精度で贅を極

めることを、時計開発の基本に置いた。これを実現するために、彼らが着手したのが薄型ムーブメントの開発だった。時計師のバレンタイン・ピアジェの指揮の下、当時、最薄の厚さ2mm、直径20.5mmの手巻きムーブメント9Pが1956年に誕生。58年には自動巻きの12Pが発表された。このムーブメントは薄さを実現するために24Kのマイクロローターをカーブした受けで支え、ローターがムーブメントのなかに納まっている。ピアジェは9Pと12Pの開発で特許を取得した。その後、ピアジェは76年に厚さ2mm、直径14.2mmのキャリバー4Pを開発したが、次第にクォーツの開発に力を注ぐようになる。他社と共にヌシヤテルに電子時計センターを設立し、スイス初のクォーツ・ムーブメント・ベータ21を誕生に導いた。自社でもバレンタインの息子で、また現ピアジェ会長のイヴ・ピアジェの従兄弟にあたる、エンジニアのガブリエル・ピアジェがクォーツ開発を主導し、76年、厚さ3.1mmのクォーツ・キャリバー7Pが誕生した。81年にはピアジェの主力ムーブメントとなる厚さ1.95mmのクォーツ、8Pが完成している。ピアジェにとって薄型ムーブメントの開発は、美しい時計を作るために必然であった。

ムーブメントの必要な要素だけを残して、カットング、ポリッシング、エングレービングによって時計のなかで光と影の動きを作るスケルトンはピアジェが得意とする点だ。さらにダイヤモンドを施し、眩さを表現したジュエリー・スケルトンもピアジェらしさだ。写真は2013年に発表された「ピアジェ アルティプラノ」ジュエリー・スケルトン。直径40mmの18Kホワイトゴールド・ケースのベゼルにはバゲットカット・ダイヤモンド40個(約3.2ct)、ミドルケースとラグ、裏蓋、リュウズ、クラスプに計370個(約1.44ct)のブリリアントカット・ダイヤモンドが輝く。また搭載する手巻きのCal.P1200Dにもブリリアントカット・ダイヤモンド259個(約0.8ct)と、カボションカットのブラックサファイア11個(約0.2ct)がセットされている。価格2602万8000円。



A.LANGE & SÖHNE

A.ランゲ&ゾーネ

☎ A.ランゲ&ゾーネ ☎ 03-3288-6639

技術開発の独自性と挑戦が生むコンプリケーション

毎年、ひとつの新しい機構の複雑時計を発表し、時計愛好家たちを楽しませてくれるA.ランゲ&ゾーネだが、今年は今まで開発した機構の集大成ともいえる“ダトグラフ・パーペチュアルカレンダー・トゥールビヨン”で改めてその技術力を披露した。もちろん単に今までの機構を重ねたわけではなく、すべての設計を見直した結果だ。また“リヒャルト・ランゲ・ジャンピングセコンド”は1867年にジャンピングセコンド機構の特許を取得したフェルディナント・アドルフ・ランゲへのオマージュでもある。この機構に現代の時計師たちはコンスタントフォースを採り入れたのだが、開発者は「時計師としての挑戦」と語った。



グランド・ランゲ1・ムーンフェイス“ルーメン”

2013年に“グランド・ランゲ1”で登場した半透明のサファイアクリスタル文字盤の“ルーメン”は、ダイヤルの表面にコーティングを施すことにより、紫外線を透過させ、それによってアウトサイズデイト表示の蓄光塗料が発光する。今年はグランド・ランゲ1・ムーンフェイスにルーメンが登場した。レーザーで1164個の星を描いたムーンディスクも、その下に置かれた蓄光プレートが発光し、星が輝いて見える。直径41mmのプラチナ・ケースに手巻きのCal.L095.4(45石、毎時2万1600振動、パワーリザーブ約72時間)を搭載する。限定200個。発売は9月以降で、参考価格は6万9600ユーロ。



ランゲ1・トゥールビヨン・パーペチュアルカレンダー

2012年にプラチナ・ケースで発表されたモデルだが、今年は18Kホワイトゴールド・ケースのバリエーションが加わった。このモデルでは文字盤外周にリング状の月表示を置き、リングが回転し6時位置にある矢印で月を示し、その上に閏年表示を設けて、ランゲ1のデザインの調和を保っている。また永久カレンダーのすべての表示は瞬時に切り替わる瞬転式を採用、サファイアクリスタルバックから見えるトゥールビヨンもストップセコンド機構を備える。ケースの直径は41.9mmで、自動巻きのCal.L082.1(76石、毎時2万1600振動、パワーリザーブ約50時間)を搭載。参考価格は31万5900ユーロ。4月以降発売予定。



サクソニア・フラッハ

2011年に登場した薄型モデルの“サクソニア フラッハ”だが、今年はさらに文字盤とケースのデザインに手が加えられた。ゴールドのインデックスが長くなり、文字盤外周の目盛りを省き、ミニマルな美しさをもつものとなった。ケースの厚さは5.9mmで前モデルと変わらないが、より薄く見えるようにフォルムが変更されている。ケースは直径40mmで、手巻きのCal.L093.1(21石、毎時2万1600振動、パワーリザーブ約72時間)を搭載する。18Kホワイトゴールドあるいはピンクゴールドがあり、共に予価259万2000円。4月以降発売予定。



サクソニア・ムーンフェイス

“サクソニア”のコレクションに新しく加わったムーンフェイス・モデルで、12時位置のアウトサイズデイト表示と6時位置のムーンフェイスがバランス良く文字盤におさまっている。852個の星をレーザーで描いたムーンフェイス表示は、新月から次の新月までの期間を99.998%の精度で再現し、誤差は約122.6年に1日。A.ランゲ&ゾーネの16個目となる新開発のムーンフェイス搭載自社製自動巻きムーブメント、Cal.L086.5(40石、毎時2万1600振動、パワーリザーブ約72時間)を、直径40mmの18Kホワイトあるいはピンクゴールドのケースに搭載する。予価は共に378万円。5月以降発売予定。



リヒャルト・ランゲ・ジャンピングセコンド

チェーンフェージと同様に精度を高めるため、ゼンマイから輪列に伝達されるトルクを一定に保つのがコンスタント・フォース・エスケープメント機構である。その秒針の動きは1秒1秒を刻み込むためジャンピング・セコンドとも呼ばれるが、この“ルモントワール機構”を組み込んだのが新しいレギュレーター・モデルのリヒャルト・ランゲ・ジャンピングセコンド。直径39.9mmのプラチナ・ケースに搭載されるのは、ゼロリセット機構を装備したCal.L049.1で、50石、2万1600振動、パワーリザーブ約42時間のスペックを持つ。12時が大型のスマールセコンド、下側左が“時”、同右が“分”表示で、その間の窓には残りのパワーリザーブが10時間を切ると赤い指標が現れる。合計で100個の限定生産で、発売は9月以降。参考価格は7万8000ユーロ。



ダトグラフ・パーペチュアルカレンダー・トゥールビヨン

クロノグラフと永久カレンダー機構をもつ“ダトグラフ・パーペチュアルカレンダー”の設計を見直すとともに、トゥールビヨンを裏蓋側に装備した、今年の新作のハイライトだ。パーペチュアルカレンダーは表示がすべて瞬時に変わる瞬転式で、ムーンフェイスの表示は約122年に1日の誤差の精度をもつ。このムーブメントのベースとなっているダトグラフはプレジジョン・ジャンピング・ミニッツカウンターを、またトゥールビヨンはA.ランゲ&ゾーネが特許を取得しているストップセコンド機構を備えるなど、独自の機構が盛り込まれている。文字盤外周の9時位置側にパワーリザーブ表示を置いた点は新しい。直径41.5mmのプラチナ・ケースに、手巻きのCal.L952.2(59石、毎時1万8000振動、パワーリザーブ約50時間)を搭載。限定100個で、参考価格は29万5000ユーロ。10月以降発売予定。

「クロノメトリー・フェルディナント・ベルトゥー」 カール・フレドリッヒ・シヨイフレ氏の新たな情熱



(写真・上)2013年にクロノメトリー・フェルディナント・ベルトゥーを創業したカール・フレドリッヒ・シヨイフレ氏。フェルディナント・ベルトゥーが1763年に出版した、時計製造の概論を綴った大著『Essai sur l'horlogerie』(写真)はショパールのミュージアム「L.U.CEUM」が所蔵している。(写真・左)L.U.CEUMはフェルディナント・ベルトゥーの作品を複数所蔵している。このマリン・クロック「M.M.No.6」もそのひとつで、1777年に製作された。



2013年末、ショパールの共同社長であるカール・フレドリッヒ・シヨイフレ氏はクロノメトリー・フェルディナント・ベルトゥーを創業した。フェルディナント・ベルトゥーは1727年3月18日にスイスのヴァル・ド・トラヴェールにある村、フランスモン・シュル・クヴェエに生まれ、26歳でパリの「公式時計職人マスター」の資格を取得。特にフランス海軍のためのマリン・クロックの開発、製造や均時差表示機構の研究で知られ、多くの著作も残している。彼は1807年6月20日、享年80歳でフランスで死去し、その後、クロノメーターの研究は甥のピエール・ルイ・ベルトゥー(1754~1813)、シャルル・オーギュスト・ベルトゥー(1798~1876)へと受け継がれた。

ベルトゥーが生まれたフランスモン・シュル・クヴェエはショパールの時計製造の本拠地のひとつであるフルリエから5kmの場所に位置する。カール・フレドリッヒ・シヨイフレ氏はヴァル・ド・トラヴェールが生んだ偉大な時計師の遺産に強い興味を抱き、ベルトゥーの時計を集め、

フルリエに設けた、自身がプロデュースする時計博物館「L.U.CEUM」で公開してきた。そしてベルトゥーの名を再び蘇らせたという思いから、2006年にフェルディナント・ベルトゥーの名を商標として獲得し、13年にその名を冠したブランドを創業したのだった。

昨年9月、クロノメトリー・フェルディナント・ベルトゥー初の時計「クロノメーター・フェルディナント・ベルトゥーFB1」が発表された。手巻きのキャリバーFB1T.FCを搭載し、トゥールビヨンに直結した中心秒針、吊り下げ式のフュゼ・チェーンを備えたコンスタントフォース脱進機、差動歯車による巻き上げシステム、吊り下げ式可動円錐」と名付けられたパワーリザーブ機構という特徴を備えている。ムーブメント及びケースの開発はショパールのグループに属さない、独立した特定のメーカーによって行われたという。

カール・フレドリッヒ・シヨイフレ氏は「ベルトゥーのマリンクロノメーターにインスピレーションを得ながら、彼と同じ革新の精神に導かれた現代的なアプローチの時計」と語っている。(T・K)



「クロノメーター フェルディナント・ベルトゥー FB1」。ケースは直径44mm、厚さ13mmの18Kローズゴールド製で、18Kローズゴールドのねじ込み式リュウズにはブラックセラミックス製のメダルが付き、またブラックセラミックス製のバネ棒を備える。八角形のケースと文字盤はフェルディナント・ベルトゥーのマリンクロックと、その文字盤のサスペンションシステムから着想を得ている。ムーブメントは防水ケースに納められ、八角形のミドルケースにねじ込み式で固定される。またミドルケースのサイドには4つのサファイアクリスタルの窓があり、ムーブメントを見ることができる。1120以上の部品から成るムーブメントはCOSC認定クロノメーターの手巻きのCal.FB-T.FC(直径35.5mm、厚さ8.0mm、46石、毎時2万1600振動、パワーリザーブ約53時間)で、フュゼ・チェーンによるコンスタントフォース機構とトゥールビヨン(6時位置)を装備する。9時位置に香箱と直接、連結する「吊り下げ式可動円錐」と名付けられたパワーリザーブ表示を備えている。サファイアクリスタル・バック。3気圧防水。予価22万ユーロ。限定50個。ほかに18Kホワイトゴールドにチタニウム製バネ棒を備えるモデル、予価22万ユーロ、限定50個もある。